

英語とゲルマン語：北欧語の視点から

著者	八亀 五三男
雑誌名	名古屋学院大学論集 言語・文化篇
巻	23
号	1
ページ	83-89
発行年	2011-10-31
URL	http://doi.org/10.15012/00000726

〔研究ノート〕

英語とゲルマン語

——北欧語の視点から——

八 亀 五三男

I はじめに

デンマーク語（以下、D=Danish）の *flittig* という語に初めて接したドイツ人は、いとも容易に母語であるドイツ語（以下、G=German）の *fleißig* を想起することができ、その意味（「勤勉な」）が明確にわかると言う¹⁾。それは、発音と綴りが酷似しているという点ともう一つ意味が同一である、意味にズレがないという言語事実による。

綴り（発音）の同一性は一目瞭然であって、語頭、語末が *fl-*、*-ig* と共通している、語頭の *fl-* に *-i-*、*-ei-* という母音が後続している、*[t]* と *[s]* は D と G で頻繁に音対応する。最後の子音対応規則は慣れてしまうと何の困難も感ずることはない：例えば、D *[t]:G[s]* = *slot:Schloß* 「城」、*sluttet:geschlossen* 「閉じられた」、*opfattelse:Auffassung* 「理解」など²⁾。

しかし、最も重要なのは意味の対応にズレがないということである。すなわち、このドイツ人は形態的に D. *flittig* と G. *fleißig* を対応させ、母語の *fleißig* の意味内容をそのまま *flittig* に適用すれば、この語を完全に習得したことになる。少し大胆な言い方になるが、発音・文字という形式と意味内容が非常に類似している場合、言語間に相違はあるのだろうか。

これに対して、英語を母語とする人が日本語の「本（ほん）」を修得する時、まず形式（文字・発音）の学習で苦しみを経験し、意味内容のズレで戸惑いを感じる。つまり、我々は「book=本」と習ったが、英語の *bankbook*, *checkbook*, *datebook*, *minute book*, *notebook*, *roll book* などには確かに *book* の一種ではあるが、「本」ではない。すなわち、両言語には意味領域の共通部分とそうでない部分とが存在するのである。

以上の言語事実を基本としながら、本稿においてはゲルマン語、特に北欧語から見ると英語の語彙にはどのような特徴が見られるのかを観察したいと思う。他言語と比較することにより、その言語内だけの分析では気付かない言語事実が見つかることがある。

II ゲルマン語における英語

「昨年コペンハーゲンでこの辞書を買った」という日本語を、同じゲルマン語である英語（E=English）、ドイツ語（G=German）、デンマーク語（D=Danish）、アイスランド語（I=Icelandic）で表現すると、

E : Last year I bought this dictionary in Copenhagen.

G : Letztes Jahr kaufte ich dieses Wörterbuch in Kopenhagen.

D : Sidste år købte jeg denne ordbog i København.

I : Árið sem leið keypti ég þessa orðabók í Kaupmannahöfn.

となる。

これらの文を比較すると、いくつかの相違点に気付く。まず初めは、「昨年」という副詞（句）が文頭に来ると、E以外の言語では、主語と動詞の位置が逆転している点である（定動詞倒置：主語＋動詞→動詞＋主語。これは義務的で、倒置しないと非文法的になる）。EのI+boughtと言う語順に対して、他は“bought+I”になっている。と言うより、Eだけが他のゲルマン語とは異なり、主語＋動詞の語順になっていると言った方が正確なのであろう³⁾。Eと同じ西ゲルマン語のGでさえ、北ゲルマン語のD、Iと同じ語順になっている。

二つ目は、「辞書」という名詞の語構成がEとそれ以外の言語では異なっている点である。これについては、後述する。また、「買う」を意味する動詞が、E：他言語=buy：kaufen, købe, kaupaの対立になっている⁴⁾。kaufen, købe, kaupaの3語だけを比較すると相違が目立つが、buyを導入すると、これら三つの動詞は同一のものという見方ができる。G, D, Iは語源を一にしている。

このように、統語論と語彙に関して、これら4言語は同じゲルマン語に属しながら、Eだけが特異な特徴を示していることがわかる。

以下においては、後者の「語彙」の実例をさらに具体的に観察したいと思うが、英語語彙の特徴を確認するために、前述の文中の「辞書」を意味する語をそれぞれの言語でもう一度列挙し、語構成の分析を行う。

E : dictionary

G : Wörterbuch

D : ordbog

I : orðabók

となり⁵⁾、G, D, Iの語構成は全て「単語」＋「本」（G. Wörter + buch, D. ord + bog, I. orða + bók）となっている。ただ、厳密に言うと、西ゲルマン語に属するオランダ語のwoordenboek（woorden + boek）を示せば明確なように、西ゲルマン語（G）ではw-で始まり、北ゲルマン語（D, I）では母音のo-で始まっている。これは通時的音韻変化の結果であって、語構成については「西」も「北」も同じである⁶⁾。

一方、Eはラテン語に由来しており、diction [話すこと]＋ary [「～に関するもの」の意味の名詞を造語する接尾辞]のように他のゲルマン語とは異なる特異な形態を持っている。G, D, Iは容易な日常語彙2つでできあがっている。つまり、Dを知っていると、「辞書」を意味するG, Iの単語の見当をつけることができるが、Eのdictionaryは思いつかない。

印欧語比較言語学的に言うと、英語（アングロ＝サクソン語）もドイツ語、デンマーク語、アイスランド語などの諸言語と同じように、ゲルマン語に属している。しかしながら、周知のよう

に、ゲルマン語ではない他言語（特にラテン語、フランス語などのイタリック語派の言語）との接触により大きな影響を受けた結果、英語はゲルマン語本来の特徴の多くを喪失してしまっている。

(1) この E. dictionary の場合は、4 言語とも意味は同じだが E だけが他の言語と形態（語構成）が異なる例である。

(2) 以下においては、北欧語の視点から、逆に類似した形態であるが意味にズレが生じている例について考えたいと思う。

III 北欧語語彙と英語語彙

デンマーク語の語彙を観察していると、英語語彙との比較において興味深い現象が多く発見することができる。以下において、そのうちのいくつかを提示してみたいと思う。

D. hund [hun]⁷⁾ は普通名詞で一般的な「犬」を意味している。「犬」に関連する単語でこの形態に類似した英語語彙を探し出すと、hound が見つかるが、この語は「犬」の中でも特殊な「獵犬」を意味する。D では、「獵犬」は jagthund (=jagt [hunting]+hund [dog]) と言い、jagt で hund の意味範囲を限定している。

D. fugl は一般的な「鳥」の総称であるのに対して、語源を一にする E の fowl は「鳥」ではあるのだが、意味が狭くなり「家禽類」を意味している。-g- : -w- と綴りが異なっているが、ゲルマン祖語では -g- と共通しており、E は通時的に -w- に変化している (cf. E. owl : D. ugle)。

D. havn は「港」⁸⁾ の意味で、頻繁に使用される日常語彙である。それに対して、E. haven は「港」の持つ機能の一つである「避難港；避難する場所」の意味の文語となっており、一般的な「港」の意味は port (<ラテン語) に譲っている。

この3語をもう一度まとめると、以下のようなになる。ゲルマン語全体を知るために、I, G も示した。

E	D	I	G
hound	hund	hundur	Hund
fowl	fugl	fugl	Vogel
haven	havn	höfn	Hafen

D, I, G では一般的な意味なのだが、E では「獵犬」「家禽」「避難所」と意味が限定的になっている。D, I, G などの言語においてはゲルマン語本来の意味をそのまま維持しているのに対して、E では意味に変化が生じている。

E に teller という語がありこれは「出納係」を意味する、すなわち動詞 tell+er という語構成になっている。tell とは「数える」の意味の古語で今は使用されないが、E がゲルマン語に属する言語であることを証明する貴重な名残であると考えられる。この tell に相当する語が D. tælle であり、これは現在でも“count”の意味で使用されている D の日常語彙である。

語源を一にする E. deer, D. dyr, I. dýr, G. Tier については、deer は「鹿」、dýr と Tier は「動

物」なのだが、D. *dyr* はその中間的な位置を占め、「鹿」「動物」の両方を意味する⁹⁾。例えば、D. *dyrehospital* 「動物病院」 [*dyr(e) + hospital*] の場合 *dyr* は「動物」の意味で使われており、*dyrekød* 「鹿肉」 [*dyr(e) + kød* ‘meat’] の場合 *dyr* は「鹿」である¹⁰⁾。

さらに E と D の複雑な対応関係は、時間などに関する、E の “hour, time, tide” と D の “time, tid, gang” という 6 つの語に見られる。形態的類似に基づいた対応関係は、

E	D
hour	
time	— time
tide	— tid
	gang

となり、E. time : D. time, E. tide : D. tid と対を成している。ところが、意味的対応は、

E	D
hour	— time
time	— tid
	— gang
tide (— tidevand)	[D. tid(e) + vand = E. time + water]

である。この対応図は、例えば「2時間」は E. two hours = D. to timer, 「長い間」は E. long time = D. lang tid, 「5回」は E. five times = D. fem gangeであることを示している¹¹⁾。

IV 「形態」と「意味」の「異」「同」パターン

形態と意味を中心にその「異」「同」について述べてきたが、2言語を比較した時の両者の基本的な「異」「同」パターンは次のようになるのではなかろうか。

形態	意味	
同	同	D. flittig : G. fleißig
同	異	D. hund : E. hound
異	同	D. ordbog : E. dictionary
異	異	E. book : J. hon [本] (J=Japanese)

この表は次のことを意味している：(D. hund : E. hound の場合) 「hund と hound は、形態は同じだが、意味は異なっている」。また、前述した D. hund : G. Hund, D. ordbog : I. orðabók などは、「形態」同一「意味」同と考える。このように、この対応表を手がかりにして、「形態」と「意味」の種々のパターンの可能性を考えることができる。

V おわりに

友人のデンマーク人はユトランド半島南部のドイツ国境に近い Tønder [tønʔɔ] という町の出

身であるが、ドイツ語はほぼ間違いなく理解できるそうである。ドイツとデンマークがその帰属をめぐる争ったこの地域を、ドイツ人は「シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン Schleswig-Holstein」と発音し、デンマークでは「スレスヴィ・ホルステン Slesvig-Holsten」と発音する。どこに相違を見つけることができるであろうか。GとDの音声的な対応関係がわかれば、すなわち音対応が定式化できれば、何の問題もない。

冒頭で示したD. flittig : G. fleißigの対応例だが、これは大阪方言：東京方言 [h] : [s]（ありまへん：ありません、おばはん：おばさん、ほな：そうなら）の対立と同じ言語現象であって、音対応のルールを無意識に学習してしまえば、もう一方の言語、方言の当該形態を思い浮かべるのに何ら困難はない（IVの表を参照）。

『月刊言語』08.12月号「ラテン語」における、逸見喜一郎氏の指摘は非常に重要である¹²⁾。「そもそも何がラテン語、何が英語か。語彙の「国籍」とは何なのか」と疑問を呈し、英語 university, フランス語 université, ドイツ語 Universitätなどは、「ラテン語 universitasの、それぞれの言語の癖にあわせてできた語形である。そもそもほとんど同じ綴りの同じ文字（ローマ字）を使うことからして同一文化圏の証である。発音はやや違う。けれどもかりに英語の中でドイツ語風に発音してもまちがいなく通じる。外来語というのでもない。あえて言えば現代語のそれぞれはラテン語形の方言形である」と断じておられる。「まちがいなく通じる」の部分は、D. flittig : G. fleißigと同じ内容のことを指摘されているのであろう。

言語的血縁関係があるがゆえに、ゲルマン系言語はゲルマン系言語で統一体を形成しており、イタリック系言語はイタリック系言語で相互に類似しまとまっている¹³⁾。しかし、それらをさらに上位の「印欧祖語」という歴史言語学的観点から見ると、これら両系言語も印欧語として一つに統一できる。foot : pedis（ラテン語 pes “foot” の単数属格。比較する部分は foot : ped-）は、その音韻対応規則（「グリムの法則」¹⁴⁾ 印欧祖語→ゲルマン語：*p→f, *d→t）がわかれば、語派が異なる言語と言えども容易に対応させることができるので、「形態は同じ」と言えるのかもしれない。「空間的方言」（共時的）に対して「時間的方言」（通時的）と呼んでもいいのではなかろうか。

ヨーロッパの言語は、確かに言語間の相違が多々見受けられるのであるが、それよりも重要なのは、文字体系、「印欧語族」という言語的血縁関係から類似性が非常に高いと言う点である。すなわち、言語的な統一体をなしているヨーロッパにもう一度焦点を当てるべきだと考えている。

注

- 1) 北欧語を始めた頃、コペンハーゲンでデンマーク語の「夏期集中講座」に参加した。その時、同じクラスにいたドイツ人が以下のような主旨の発言をした：「今日新しく flittig という単語が出てきた。これに発音と綴りが似たドイツ語の単語を思い浮かべると、果たしてそのドイツ語の単語 fleißig がこのデンマーク語の単語に対応している。このような手順を踏むと、デンマーク語の単語は何の問題もなく習得できる」

- 2) D : G=【dental】: [s] の例としては, bedre : besser [better], flod : Fluß[river], fod : Fuß [foot], stræde : Straße [street]などを挙げるができる。

- 3) 従属文が文頭に来る場合も, この定動詞倒置が起こる:

E. When I came home, he was in his room.. [S+V]

D. Da jeg kom hjem, var han i sit værelse.. [V+S]

- 4) G. kaufte, D. købte, I. keypti は, それぞれ G. kaufen, I. kaupa の 1 人称単数過去形, D. købe の過去形である。

- 5) ただし, G, I は名詞に格変化があり, ここに示された形は「単数主格」である。

- 6) 「西ゲルマン語」(英語, ドイツ語) と「北ゲルマン語」(デンマーク語, アイスランド語) の明確な相違は以下の例にも見ることができる:

E. butter	year	fox	fish	old	sleep
G. Butter	Jahr	Fuchs	Fisch	alt	schlafen
D. smør	år	ræv	fisk	gammel	sove
I. smjör	ár	refur	fiskur	gamall	sofa

- 7) “she” の意味の hun は [hun] という発音で, glottal stop [ʔ] は入らない。

- 8) D. havn はデンマークの首都 København [Køben-havn] の中に使用されており, 「商人の港」と言う意味である (I. Kaupmannahöfn, 古デンマーク語 Køpman(næ)hafn)。

- 9) 『英語学事典』 p. 55

- 10) 古英語 dēor は「動物」の意味であった。他に, D. sky 「雲」: E. sky 「空」, D. gård : E. yard (garden) などがあるが, それらは今後さらに詳しく調べてみたい。

- 11) G と F (=French) を加えてみると, 以下のような対応になる。

E	D	G	F
hour — time	—	Stunde —	heure
time —	tid —	Zeit —	temps
	gang —	Mal —	fois

- 12) 『月刊言語』 08.12 月号: 特集「古典語・古代語の世界」 p. 21

- 13) スペイン語とポルトガル語の対応を一例示す:

スペイン語	ポルトガル語	英語
efecto	efeito	effect
perfecto	perfeito	perfect
directo	direito	direct
confecto	confeito	confection

(因みに, 日本語では, 順番に「エフェクト」「パーフェクト」「ダイレクト」「コンペイトー (金米糖←ポルトガル語)」となる)

ブラジル人は, スペイン語: ポルトガル語=[ekto]: [eito] の音対応を, 意識的にしろ無意識的にしろ学習してしまえば, それ以後母語のポルトガル語に対応するスペイン語を容易に想起することができる。

- 14) 「グリムの法則」とは, 印欧祖語の *p, *d がギリシャ語, ラテン語などではそのまま p, d として維持されているのに対して, ゲルマン語では規則的にそれぞれ f, t と変化している現象を言う, すなわち, 無声閉鎖音→無声摩擦音, 有声閉鎖音→無声閉鎖音と言う通時的音韻変化のことである。

参考文献

- Simensen, Erik “The Old Nordic lexicon” O. Bandle (ed.) *The Nordic Languages Vol. 1* (Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2002)
- 逸見喜一郎「ラテン語」『月刊言語』Vol. 37・No. 12 (2008)
- 森田貞雄監修『現代デンマーク語辞典』(東京：大学書林, 2011)
- 松浪有・池上嘉彦・今井邦彦編『英語学事典』(東京：大修館書店, 1983)